

「21世紀COEプログラム」(平成15年度採択)中間評価結果

機関名	兵庫県立大学	拠点番号	F26
申請分野	医学系		
拠点プログラム名称 (英訳名)	ユビキタス社会における災害看護拠点の形成 Development of Center of Excellence for Disaster Nursing in a Ubiquitous Society		
研究分野及びキーワード	〈研究分野：看護学〉(災害看護)(ユビキタス社会)(データベース)(看護ケア方略)(ネットワーク)		
専攻等名	看護学研究科看護学専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー名) 山本 あい子 教授 他 18名		

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書(平成17年4月現在)を抜粋

<p><本拠点がカバーする学問分野について> 災害看護学を中心に救命救急看護・発達看護・地域看護・治療看護・組織看護など看護学全般の分野である。近接領域としては、医学・情報科学・社会科学・教育学などの分野を含んでいる。</p>
<p><本拠点の目的> ユビキタス社会の発想を基幹とし、災害発生前の備えから、発生後の中・長期的な視野のもと、看護ケアの視点から災害時に地域や人々が主体的に修復・回復できる力(健康生活再生力)を、平常時から形成することが目的である。1)情報基地の整備、2)住民・国内外の看護専門職支援ネットワークの構築、3)看護ケア方略の構築の3目標を設定している。</p>
<p><計画：当初目的に対する進捗状況等> 計画通りに進捗している項目は、1)情報基地の整備：①災害看護事例データベースシステムとセキュリティを考慮したナレッジデータベースシステムの構築、②情報入手を容易にするアプリケーションの構築、③災害看護地域支援システムのシュミレーションモデル構築。2)支援ネットワークの構築：①看護支援ネットワークの稼働継続と実態追跡調査、②住民参加型支え合いネットワーク構築に向けた基礎調査、③アジア圏看護職間のネットワークの構築・稼働。3)看護ケア方略の構築：①災害時に支援ニーズの高い人々のケアニーズの明確化、②災害看護教育内容および教育モデルの開発・精練と災害看護教育実施状況調査、③継続教育におけるE-Learningプログラムのデータ化と発信、④行動変容教育プログラムの実施(看護職対象プログラムは、2月に予定)。計画以上に進捗している活動や新規活動は、①災害時に支援ニーズの高い人々を対象とした看護ケアパッケージの開発、試行・精練、②腎不全患者等への面接調査、③インドネシア・スマトラ島沖地震発生後、アジア圏看護職間のネットワークを稼働し、情報交換・情報提供の実施、③看護基礎教育終了時の災害看護能力の検討がある。4)その他、WHO協力センター認可に向けた活動、国連防災世界会議への参加等全て予定通りである。</p>
<p><本拠点の特色> ①災害発生前の備えに加えて、災害発生後の中・長期を視野に入れている、②地域とそこに住む個人々人を対象としている、③地域と個人の健康生活再生力の強化を指向している、④看護ケア方法や教育・訓練、情報ネットワークと人間系ネットワークの稼働を考えている、⑤国際的にも災害看護学の研究教育拠点は存在せず、本構想自体が他に類を見ない内容と規模の計画となっている。</p>
<p><本拠点のCOEとしての重要性・発展性> 阪神・淡路大震災から10年が経つが、依然として国内外で災害が多発している。最近のインドネシアスマトラ島沖地震は、かつて経験したことのない規模の大きさの災害に加えて、発生後に生じる感染症や子どもたちの心のケアのあり方、また人々の生活・健康問題と対応方法などが模索されている。国連防災世界会議の兵庫宣言では、各国が協力し合い災害に対して備えていくことが述べられ、災害対応は国を越えて早急に取り組むべき課題として急浮上してきている。</p>
<p><本プログラム終了後に期待される研究・教育の成果> 1. 常時稼働する情報連携システムが構築される、2. 看護ケア方略が開発される、3. 支援ネットワークが構築される、4. 国際機関との連携の確立、5. 国際災害看護学会の設立、6. 人材が育成される。</p>
<p><本拠点における学術的・社会的意義等> 阪神・淡路大震災以前には、救命救急・災害医療等の概念はあったが、国内外を含めて「災害看護」の概念自体が存在していなかった。本拠点活動により、災害看護という概念が一般的となり、活動の継続により災害看護学構築・人材育成に多大な貢献となる。また日本や世界が模索している災害に対する備えのあり方として、個人を含めた地域コミュニティの健康生活再生力形成モデルを提示することができ、災害発生前後の人々の健康や社会に対して大きな貢献となる。更に国際機関との連携や国際学会設立を通し、この分野で世界に冠たる研究教育機能を果たすことができる。</p>

◇21世紀COEプログラム委員会における評価

<p>(総括評価) 当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。</p>
<p>(コメント) ユビキタス社会における災害看護拠点の形成というCOE活動は、災害看護という初めての専門コースをつくることにおいて意義は深い。本拠点活動によって、国内外から災害看護に関してコンサルテーションや情報提供の要請を受け、また、学会や研修会において重要な講演がなされ、学会活動が活性化していることや、国際防災世界会議において、災害と健康の重要性を認識させたことは、本拠点のアピールできる点であり、評価できる。 また、以下の事項を考慮し、今後さらなる努力が期待される。 1) 日本中どこで起るか分からない大規模災害に対して、基本的な部分をより具体的にガイドラインにまとめ、全国に発信していただきたい。この場合、他学部、他大学との連携が必要である。 2) 若手研究者の人材育成について、今後COEを活用した具体的な実績を明確に示されたい。 3) 新潟中越地震において、研究成果がどのように応用され、どのように評価されたのか、さらに今後に向けた課題は何であるかを具体的にまとめていただきたい。また、尼崎の電車事故において、本災害看護拠点はどのような役割を果たし、その際の課題は何であったのかを追求していただきたい。</p>